



TITLE:

上島先生を憶ふ

AUTHOR(S):

荒木, 健兒

---

CITATION:

荒木, 健兒. 上島先生を憶ふ. 天界 1936, 16(180): 211-212

ISSUE DATE:

1936-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167198>

RIGHT:

訃報に接し、自分達の責任の大になつた事を感じるに先立ち、一入尊敬してゐた故人が偲ばれる。

もう御葬儀も一昨日にすんださうだし、遠くはなれてゐては故人に弔意の表はし様もない。又先月中旬上京した時、時間を繰合はし御見舞に行けばよかつたと悔いても致し方ない。此處に拙文を記し、故人の靈にさし上げる次第である。

(1936. 3月3日 於倉敷)

## 上島先生を憶ふ

荒木健児

去年の3月1日、倉敷から花山に移り、最初の仕事は氣象の觀測と太陽寫眞觀測とであつた。そのため、これまで殆んど交渉のなかつた上島先生の御指導を親しく受ける機會に恵まれた。

太陽物理學の權威者として、教室では天體物理學の講義も擔當され、若年にして講師にあげられ、その着實な研究的態度は既に將來の教授を約束するに十分であつたといはれてゐる。

一旦計畫したことはどこまでもやり通すといふ堅い御決心は、太陽觀測上にもあらはれ、さきに分光太陽鏡を自製され、又、空氣の動搖による太陽縁邊像の寫眞的調査の操作の如きは、1日數10枚の撮影に少しの疲勞の色も見せられず、もし、私が先生の助手であつたなら、私の方が先にくたばつてしまふであらう。先生のすさまじい御元氣には驚くほかなかつた。

しかし、これは一面、先生の生涯をあやまつた。病をおして2時間連續の講義を敢てせられては、1日の休養を1ヶ月に延長せねばならなかつたのである。

しづかに學問を楽しむ人であつたから、私達の間の話題に上るやうなことは殆んどなかつた。典型的の紳士であつた。

去年の春、空が曇つてゐる日、太陽館の暗室にとちこもつて居られたことがあつた。その時、私は先生が大聲で數年前に全國津々浦々まで征服した流行歌を歌はれるのを聞いた。この日は餘程お楽しさうであつた。現像された

寫眞は5本のフィルムで、人物や景色が寫つてゐた。

天界の去年7月號に、星見山人氏が「花山だより」の中に、祇園の藝者を2人のせて深夜の京阪國道をドライブする事件を書いて居られるが、あの主人公が上島先生であることは天文臺の内部の人以外には殆んど知られてゐないであらう。ある日の午餐の席で、ボツリボツリと話されたものである。一同大笑したが、この喜劇も今は悲しい追憶になつてしまつた。

本巻頭に掲げる寫眞は1934年9月、先生が太陽物理學の講義を終へ、研究室へ引揚げやうとせられた時、高倉理學士が學生時代に撮影されたものである。こゝに先生の面影をしのぶこととする。

---

## 上島昇君を悼む

上島昇君は明治38年1月17日三重縣一志郡稻葉村に生れ、八高を経て京都帝大へ大正14年春に入學、昭和3年に理學部を卒業した秀才である。八高時代に蓮沼氏(故人)の影響で天文に興味を持つやうになつたと自ら話してゐたが、大學卒業後1年間は大學院に入り、昭和4年天文學の講師を拜命、今日に至つた。太陽物理學を專攻し、花山天文台創立以來、太陽部長として、日夜觀測研究を勵んだ。昭和4年5月9日の日食觀測隊に加はつてスマトラに行つたこともある。昨年春、長き苦心の結果として分光太陽鏡を自作し、之れを以つて年末まで太陽面の水素斑を毎日觀察した。此の器械は、目下、日本は勿論、東洋に唯一のもので、花山の誇りである。

平素から頑健であつたが、今年初から肋膜炎を病み、腹膜炎に轉じ、遂に去る2月末日京都府立醫科大學病院で死去した。

かけがへのない一人を失つて、花山の損失は大きい。しかし、あとに残した太陽研究上の功績は、今後此の方面に進む者の指針とならうと思ふ。

(山本一清記す)

---